

Bird Research Annual Report 2023

バードリサーチ活動報告



NPO法人 バードリサーチ
Japan Bird Research Association

ごあいさつ

2023年3月、生物多様性国家戦略2023-2030が策定されました。長期的な基礎調査とモニタリング基盤の整備や、生物多様性の取組に対するさらなる市民参加など、バードリサーチの活動にも沿う行動目標が多く示されました。バードリサーチでは、今後さらに高まる生物多様性保全の機運に対応すべく、現在行っているモニタリング調査やさまざまな基礎調査を継続・拡充したいと考えています。

鳥の生態や生息状況に興味を持つ方々とともに普段の野鳥観察の記録を科学的なデータとして収集することも、基礎調査として重要です。様々なプロジェクトを通して会員の皆様や協力者の方と一緒に収集したデータを解析し、成果を還元していきます。

今年もたくさんの仲間と全国で調査やデータ収集を行うことができました。調査に参加して下さった皆様、鳥の記録提供や寄付等でご協力を下さった皆様にお礼を申し上げますと共に、今年の実績の一部をここに報告いたします。2024年もぜひ、バードリサーチの活動にご参加ください。



イソヒヨドリ (Photo: 西 眞史)

Staff

職員

左から 植村慎吾、野村佳那子、守屋年史、神山和夫、高木憲太郎、植田睦之



嘱託研究員



左から
黒沢令子
平野敏明
三上かつら



左から
シンバ・チャン
山崎優佑
福田佳弘



左から
熊田那央
奴賀俊光
藤田 薫



ホウロクシギ (Photo: 山口靖弘)

この1年の活動をコンパクトにまとめてお伝えします。

NEWS & TOPICS

越冬分布調査の最終報告書ができました 【BRNews 2023年2月:2】

2016年1月から2022年2月まで、越冬期の日本の鳥の分布を明らかにする全国鳥類越冬分布調査を行ないました。396人の方に情報を提供いただき、バードリサーチの野鳥記録データベース「フィールドノート」などの情報を集計して分布図をつくりました。ご協力・ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。この最終報告冊子を2月

に発行しました。この活動は海外からも注目されているので、そうした人たちも読むことができるように英語版も作成しました。

調査結果からは、繁殖分布調査と同様に小型の魚食性の種が分布を縮小していることや、ヒクイナなどの水辺で採食する鳥、コクマルガラスやガンカモ類など水田などの開けた地面で採食する鳥など、凍結や積雪の影響を受けやすい鳥が分布を大きく北上させるなど、冬期ならではの温暖化の影響と思われる分布の拡大が見られました。



◀発行した最終報告書



←冊子のダウンロードはこちらから

<https://www.bird-atlas.jp/pub.html>



ヒクイナ (Photo: 神戸宇孝)

巣箱カメラでヤマガラの繁殖成績のモニタリングを試行

【陸生鳥類調査情報(1)】



▲巣作り中のヤマガラの親



▲産卵された卵

秩父演習林で実施してきた温度ロガーを使ったヤマガラの繁殖時期の調査では、気温の高い年にはヤマガラが早くから繁殖すること、そして、そうした早く繁殖する年には繁殖に失敗することが多いことがわかってきました。しかし、なぜ、気温の高い年に繁殖に失敗するヤマガラが多いのかはわかっていません。そこで、森林総合研究所の関さんから教えてもらい、巣箱にカメラを

つけて、モニタリングする試みを始めました。カメラを設置した巣箱のうちの1つをヤマガラが利用して、卵の数、ヒナのふ化した数、巣立ちしたヒナの数など、温度ロガーでは知ることができなかった情報を明らかにすることができました。また、モニタリングする上での課題も明らかになったので、今後、それを解決しつつ、本格的なモニタリングに進んでいきたいと考えています。



ヤマガラ (Photo: 平野あかね)

北海道で秋のトウネンが減少



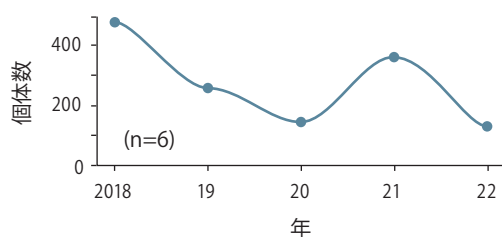
トウネン (Photo: 湯浅芳彦)

バードリサーチでは、環境省からモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査を受託し、全国のシギ・チドリ類調査のとりまとめを行っています。トウネンは、ロシアやアラスカの北極圏のツンドラ地帯で繁殖し、東南アジア、オーストラリアで越冬する小型のシギです。国内では、春・秋期の渡り時期によく観察されるシギで、秋期にはすべてのシギ・チドリのうち最も多く観察される種でした。しかしながら、春期は2013年頃から、秋期は2010年頃から、国内で観察される個体数が減少傾向にあります。地域別に近年の推移を見ると、秋期にトウネンが多かった北海道地域で、減少していることが分かりま

した。秋期の観察数には、その夏に繁殖した幼鳥が含まれるため、繁殖がうまくいっていないことを表しているのかもしれませんが。

環境省のレッドリストでは絶滅危惧種には指定されていませんが、今後その生息状況に注意が必要な種と考えられます。

▼過去5年秋期におけるトウネンの北海道地域の最大個体数(平均値)の推移



コブハクチョウ分布調査

— 全体の4割が利根川流域に生息

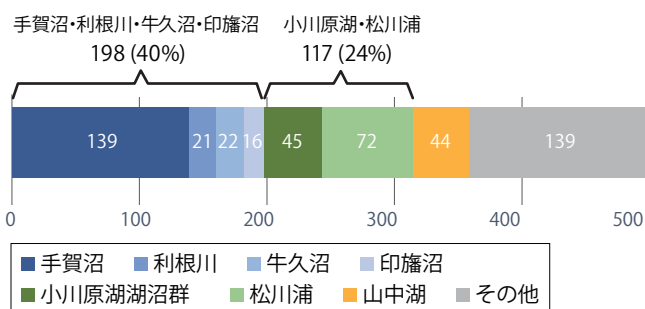


コブハクチョウ (Photo: 桑森亮)

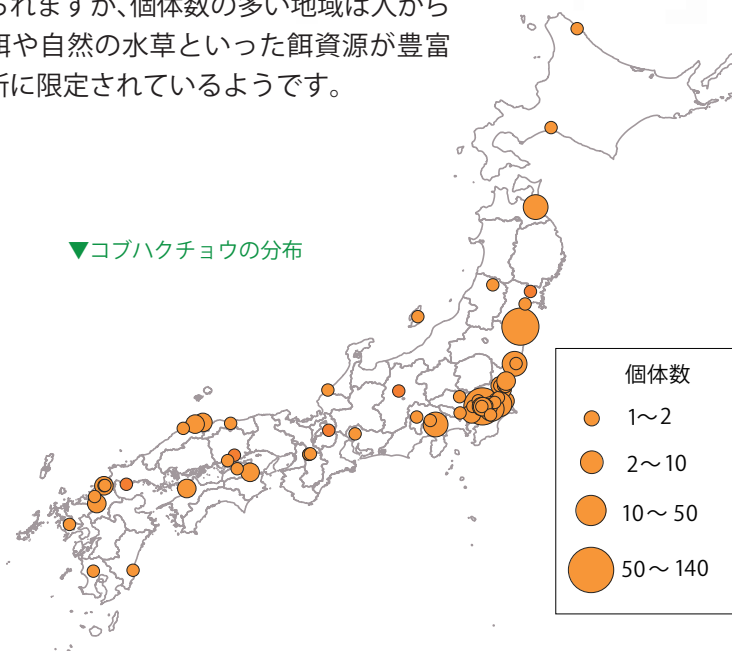
外来種として広まっているコブハクチョウの分布調査を2023年1月に実施しました。環境省が実施しているガンカモ調査の記録と合わせて分析したところ、野外にいる日本のコブハクチョウの総数は最低でも500羽で、そのうち4割が利根川とその流域にある千葉県の手賀沼や茨城県の牛久沼に生息していました。それに次いで数が多い生息地は、青森県の小川原湖と福島県の松川浦でした。

小川原湖と松川浦のあいだには渡りがあり、この二カ所にいるのは共通の個体群ではないかと考えています。コブハクチョウは全国で見られますが、個体数の多い地域は人からの給餌や自然の水草といった餌資源が豊富な場所に限定されているようです。

▼コブハクチョウが多い地域と個体数



▼コブハクチョウの分布



ウグイスとキビタキの繁殖時期の未来予想

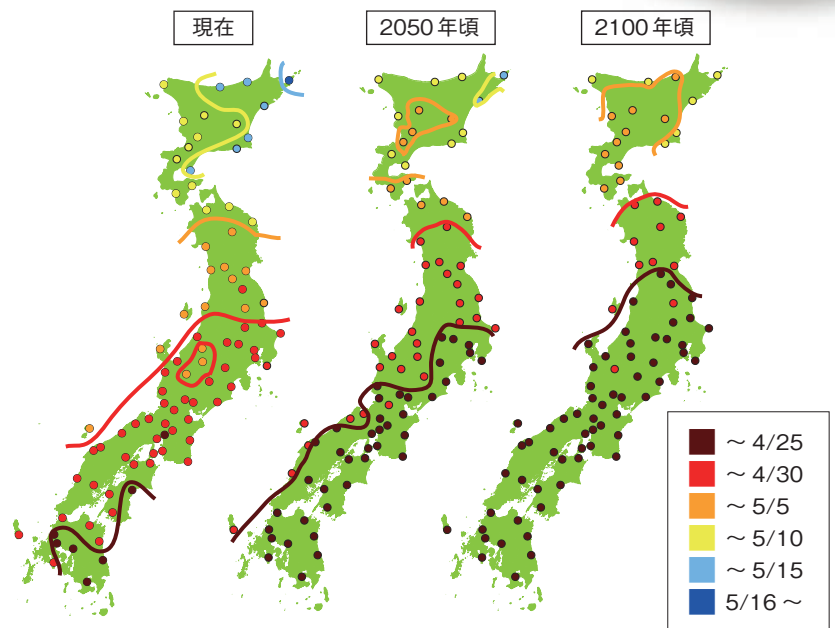
【BRNews 2023年1月:1】

2021年から、季節前線ウォッチのデータをもとにした「ウグイスの初鳴き予報」を実施しています。これまでの初鳴き日と気温の関係をもとに、その年の気温から、いつウグイスの初鳴きが聞かれるかを予報する試みです。それをさらに拡張して、未来のウグイスの初鳴きを予想してみました。農研機構が公開している農業気象データの2100年までの気候予測データを使うと、4°C上昇する温暖化シナリオでは、ウグイスのさえずりは、2050年には、現在よりも平均で18日、2100年には27日も早くなると予測されました。それに対して、キビタキが活発にさえずる時期は、2050年には3.4日、2100年には6.3日早くなると予測されるなど、ウグイスと比べて早くなる幅がかなり小さいことがわかりました。

ウグイスは一年中日本にいる留鳥ですが、キビタキは日本に繁殖のために夏に渡ってくる夏鳥です。海外の研究では、夏鳥は温暖化についていけなくて、数が減っている可能性が示されていますが、この結果も同様の

ことを意味しているのかもしれませんが。引き続き、初認記録のモニタリングを続けて、気候変動の鳥たちへの影響を明らかにしていきたいと思います。

▶キビタキが活発にさえずる時期の未来予想図



キビタキ
(Photo: 中村健三)

新たに3つの山でイワヒバリの生息を確認

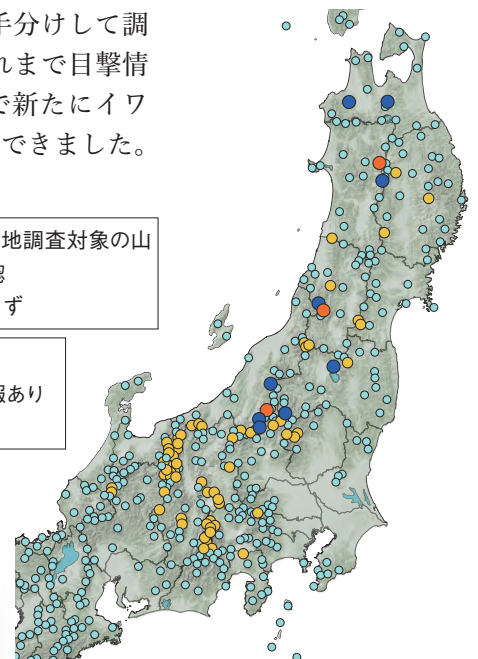
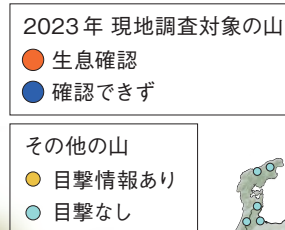
【BRNews 2023年7月:2】

イワヒバリは、高山帯の岩場や雪渓、草地で虫などを食べ、岩の隙間などに営巣して繁殖する鳥です。バードリサーチでは、2022年7月から目撃情報の収集をはじめ、登山記録サイトの写真の投稿をチェックして得られた目撃情報と合わせて2023年10月末までに1,412件の目撃情報を収集しました。

登山者が多い山では、多くの目撃情報が寄せられます。しかし、遠くて険しいなど、気軽に行けない山では、情報が不足します。環境情報から生息適地の分析をより正確に行うため、目撃情報がない山のうち、生息の可能性はあるかないかのグレーゾーンにあると思われた山について、2023年の夏に、会員

参加で東北と北関東の11座を手分けして調査を行いました。その結果、これまで目撃情報の得られていなかった3座で新たにイワヒバリの生息を確認することができました。

▶夏(5~9月)にイワヒバリが目撃された山と、現地調査を行った山の結果



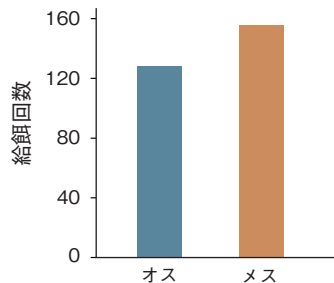
イワヒバリ
(Photo: 桑森 亮)

銀座のツバメの餌調査

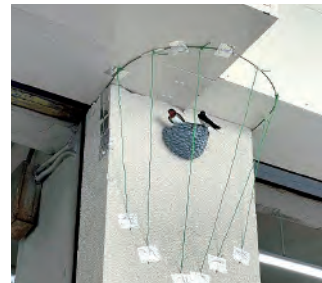
— 養蜂場依存は高いが自然の昆虫も多い 【BRNews 2022年8月:3】

老舗デパートの松屋銀座に設置させてもらっているツバメの人工巣で、親ツバメがヒナに餌の昆虫を運ぶ行動を調べたところ、3日間の観察期間中いずれの日もメスのほうが餌を運ぶ回数が多く、合計でオスが128回とメスが155回でした。銀座ではこのひとつがだけの調査ですが、他の研究でもメスのほうが給餌回数が多いことが示されています。親ツバメが運んでくる虫は、午前中はハエ、ハチ、羽アリ、チョウ、クサカゲロウなどで、お昼ごろからは近くのビルの屋上養蜂場からミツバチを運んでくるようになりました。ミツバチはすべてが毒針のないオスバチで、お昼ごろに結婚飛行に飛び立つところを捕まえてくるようです。ミツバチへの依存は高いものの、大都会の銀座にもツバメの餌になる飛翔性昆虫は生息しているようです。

ツバメの撮影は、写真家の佐藤信敏さんにご協力いただきました。



▲雌雄の給餌回数



▲調査を行った松屋銀座の人工巣
(カラスを防ぐためひもを張ってある)
(Photo: 神山和夫)



(Photo: 佐藤信敏)

食性データベース

— これまでの概要とカワウのネズミ捕食 【BRNews 2022年3月:1】

鳥がいつどこでどんな餌を食べているのかを1例ずつ記録していく食性データベースは2年目に入りました。会員の皆様やその他の観察者から情報をたくさん登録してもらっていて、最近では月100件の投稿ペースになってきました！記録は全国から来ていますが、東北からの情報は少し少なめです。普通種の普通の食性記録を地道に溜めて、生態系の中での鳥類の役割や、その長期的な変化の記述、その他色々な切り口での研究に情報を提供する場として役立てていきます。

普通種の普通の食性記録を重視している一方で、投稿された中にはとても珍しい食性の記録もありました。例えばカワウがドブネズミを食べたという記録。カワウの食性については世界中でたくさんの研究がありますが、哺乳類を食べたという記録は実はほとんどありません。たくさんの普通の食性記録と合わせて、こうした記録にも注目しながら皆さんと記録を溜めていけたらと思います。

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト —投票結果と上位2件の調査研究プラン

【BRNews 2022年12月:4, 2023年5月:2】

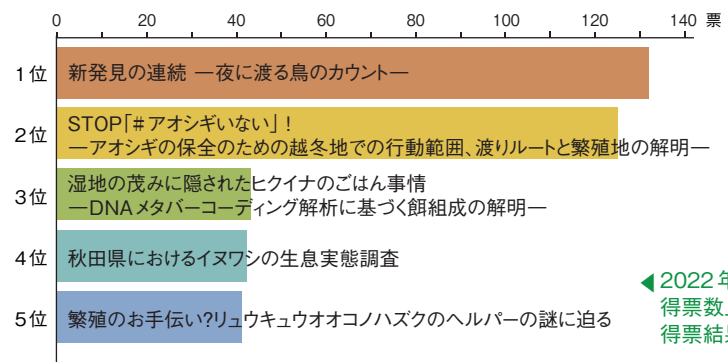
みなさまから寄付を募って、それをもとに鳥類の調査や研究を行う会員の方に支援しました。2022年度の支援の総額は約222万円。これらを得票数で割り振り、10件の支援先に贈呈しました。得票数の最も多かった調査研究プランは原星一さんによる「新発見の連続—夜に渡る鳥のカウンター—」でした。細谷淳さん、田谷昌仁さん、竹田山原楽さんによる「STOP「#アオシギいない」!—アオシギの保全のための越冬地での行動範囲、渡りルートと繁殖地の解明—」も多くの得票を得て1位に迫りましたが、わずかに及びませんでした。

原星一さんによる夜渡る鳥の調査は2年連続で支援対象に選ばれましたが、一年目の秋の調査でマミチャジナイとアオジがそれぞれ3,000羽以上記録されて、他の鳥よりも頭抜けて多かったようです。2年分のデータの蓄積によってどんなことがわかって

るでしょうか。細谷さんたちによるアオシギの調査はGPSロガーを使用して、越冬地での環境利用や行動範囲のほか、渡りルートや繁殖地の解明を目指し、モニタリング方法の検討もする計画です。アオシギは冬鳥として山間部の溪流や湿地に渡来しますが、生態があまりわかっていない鳥のひとつです。どんな成果が得られるのか、楽しみにしたいと思います。

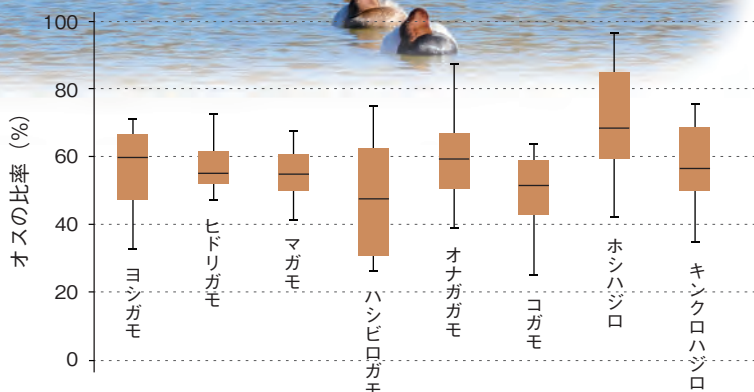


アオシギ
(Photo: 渡辺美郎)



インターネット・バードソンで カモの性比調査を実施しました

▼オスが多いホシハジロの群れ
(Photo: 神山和夫)



▲バードソンで集まったカモ類の性比

2023年1月のインターネット・バードソンのテーマはカモの性比調査でした。参加者の皆さんから届いた雌雄別のカモのカウント記録を分析したところ、いずれの種もオス率の中央値が50~60%くらいで、いちばんオス率が高かったホシハジロでは約70%にもなりました。カモ類は生まれたときは雌雄同数ですが、メスは子育てをするせいで天敵に捕食されやすくなる結果、オスの数の方が多くなっているようです。ホシハジロは国内の越冬数の減少が著しい種で、同様に減少傾向にあるヨーロッパでもオス率が高くなっています。日本の越冬地と中国北部からロシアにかけての繁殖地の両方で環境が悪化している可能性があるため、今後とも注意が必要です。

みんなで進める 調査・研究

バードリサーチでは、野鳥の観察、調査、研究のための様々な取り組みを行っています。

調査や研究の成果を発表し交流する場として2020年から3回目の開催となった『バードリサーチ鳥類学大会』には560名が参加し、活発な情報交換が行われました。野鳥観察の記録をまとめたり、その記録が『季節前線ウォッチ』や様々な場面での分布情報として活用される『フィールドノート』の年間利用者数は644名でした。また、年始と5月には、フィールドノートを利用した『インターネット・バードソン』も企画していますので、ぜひご参加ください。

そのほかに、『さえざり検索』や『TORIクイズ』など、鳴き声や画像による識別学習の支援やYouTubeなどを利用した発信なども行い、今後も野鳥に関する調査・研究の支援を行っていきます。

2022年度、バードリサーチの活動には3,940名の皆さんが参加してくださいました。そして、452名から4,016,010円の寄付をいただきました。寄付は、研究支援、ツバメの保全活動などに使用させていただいています。全国の方から寄せられた報告をまとめ、野鳥の生態や国内の自然環境を知る手がかりを発信していきたいと考えています。さらなるご支援をよろしく願いいたします。



TORI quizは
こちらからどうぞ ↓



表紙写真：ハッカチヨウ (Photo: 川上由希)

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒186-0002 東京都国立市東 1-4-28 篠崎ビル 302

E-mail : br@bird-research.jp

http://www.bird-research.jp

デザイン：いきものパレット

